


今 月 の 一 冊

元木更津市教育委員会教育長 西村 堯 選

聖書がわかれば世界が見える

池上 彰 著 ・ SB新書

ISBN978-4-8156-1351-8

990 円

「はじめに — 『聖書』がいまの世界をつくった」の中で、著者は、本書の位置づけについて次のように述べる。

とはいえ、「旧約聖書」と「新約聖書」に分かれて分量が多いことから、読み始めるのは億劫かも知れません。そこで、まずは「聖書」に何が書かれているかを解説することにしました。そこからキリスト教が世界に広がり、さまざまな出来事が生まれることになった歴史を振り返ります。国際情勢を理解する一助として、どうぞ気軽に読み始めてください。

（「はじめに」より）

私はこれまで、ヨーロッパの文学、映画などを理解する上で、「聖書」は必読文献だと思ってきたが、残念ながら、これを通読することはできなかった。しかし、その代替として、次のような本を読み漁ってきた。

- 阿刀田 高 「旧約聖書を知っていますか」 (新潮文庫)
- 同 「新約聖書を知っていますか」 (新潮文庫)
- 橋爪大三郎・大澤真幸 「ふしぎなキリスト教」 (講談社現代新書)
- 塩野 七生 「十字軍物語」【第一巻～第四巻】 (新潮文庫)

これらの著作も、それぞれ特色のある本であるが、今回取り上げた池上氏の著作は、分かり易く、また、「聖書」あるいはキリスト教の歴史を包括的に理解するには、最適の書ではないかと思う。

とりわけ、現在の世界情勢と関連させた解説は、まさに「目からうろこ」（これも新約聖書に由来する言葉）。私は、ページを繰る毎に「そうだったのか！」と、納得した次第である。

著作全体を紹介することはできないので、主に、第 5 章「キリスト教の分裂 ― 正教会の成立」と第 9 章「福音派が大きな影響力を持つ米社会」について、触れることにする。

まず、「正教会の成立」、特にロシア正教会とロシアのウクライナ侵攻についての記述は、注目に値する。

皆さんもご存じのとおり、ロシア正教会のトップ、キリル総主教が、ウクライナ侵攻を「祝福」したことは、世界を驚かせた。本書によれば、このキリル総主教とプーチン大統領とは同郷(サンクトペテルブルク出身)で、同じく KGB 出身とのことである。

キリル総主教の最近の発言を見ると「ロシアとウクライナは一体のものだ」という認識を持っているようです。これは、プーチン大統領と全く同じです。ロシアとベラルーシとウクライナはルーツが同じであり、そもそも一体のものなのに、西側によってウクライナが裏切っているという認識なのです。

(p.173)

ここに至るまでには、正教会内部の対立があったとのことで、2018年12月に、それまでロシア正教会に所属していたウクライナ正教会が独立を宣言した

こと。これは、ロシア正教会の承認を得ないもので、キリル総主教は激怒したとのことである。

こうした宗教的対立が背景にあって、今のウクライナ戦争があるということが分かってくる。(もちろん「宗教的対立」だけではないと思うが。)

さて、奇しくも、私は 2023 年 6 月 20 日付の毎日新聞の特集記事「クローズ アップ」を読んだ。

見出しを紹介する。

「ロシア:正教会へ深まる依存」

「ウクライナ:揺れる国と教会」

とある。

ロシアの記事では、これまでモスクワにあるトレチャコフ美術館に保管されていたイコン(聖像画)の傑作「聖三位一体」が、正教会側に返還されることになった。これは、プーチン大統領が介入して収蔵先を変更したとのことである。

ウクライナでの軍事作戦を収束させられない中、政権がロシア正教会に頼ろうとする側面が色濃くなっている模様だ。

(毎日新聞)

と述べられる。

一方、ウクライナ側でも「国と教会の関係が大きく揺れている」とし、政府が「独立を唱える一派を支持する立場に転じた」とある。これについては、国際社会の一部から「信教の自由が侵害されているおそれがある」との懸念が表明されている、とのことである。

これらの記事を読んだ時、先に本書を読んでいたため、胸にストーンと落ちたのである。

さて、次に、アメリカの「福音派」についてである。

「福音派」は、最近のアメリカでは、大きな影響力を持つようになっているとのことである。

保守的な白人に多いプロテスタントの福音派は、中南米や中東からの移民の増大で、自らが少数派に転落しつつあることに危機感を募らせているとされています。

(p.231)

近年の大統領選挙では、レーガン、ブッシュ大統領を当選させ、2016年にはトランプ氏を当選させている。中西部や南部に行くと共和党を支持する保守的な人が多く、「バイブルベルト(聖書地帯)」と呼ばれているという。

家族の大切さや同性婚反対、妊娠中絶反対、国家への忠誠心、勤勉さを重視

(p.235)

するという。

来年のアメリカ大統領選にも、大きな影響力を持つであろう。

紙数の都合で、後半は駆け足になったが、「聖書」を通読できなくても、本書を読むことで、「教養」としてのキリスト教理解が進むことは間違いない。特に現代の世界情勢との結びつきが分かるのは、刮目に価する。ぜひご一読を。

今月の一冊 (令和5年9月号 第195号)